

教員採用試験

2025

教職教養

テキスト

TEXT

教育心理

コントロールタワー

講義回	学習内容		テキスト			トレーニング
	テーマ	内容	章	節	対応ページ	対応問題
第 1 回	教育心理学の概要	教育心理学とは	第 1 章	1	P.1	問題 1～5
		心理学の歴史と主な人物		2	P.3	
第 2 回	発達	発達とは何か	第 2 章	1	P.7	問題 1～16
		発達の段階と発達課題		2	P.13	
		発達の諸理論		3	P.23	
第 3 回	学習	基本的な学習理論	第 3 章	1	P.34	問題 1～17
		動機づけ		2	P.47	
		記憶と忘却		3	P.56	
		学習の転移		4	P.62	
第 4 回	人格と適応	人格の理論	第 4 章	1	P.70	問題 1～13
		適応		2	P.85	
第 5 回	その他の心理領域	適応における困難	第 5 章	1	P.97	問題 1～14
		カウンセリング・教育相談		2	P.103	
		その他の心理療法		3	P.111	
第 6 回	教育評価	評価の基本理論	第 6 章	1	P.122	問題 1～11
		知能検査		2	P.127	
	学級集団	学級経営と集団機能	第 7 章	1	P.134	問題 1～6
		学級集団の理解と測定		2	P.139	

教職教養 過去3年分の出題傾向表1 2021年～2023年実施試験

科目	分野	北海道・札幌市			青森県			岩手県			秋田県			宮城県・仙台市			山形県			福島県			栃木県			群馬県			
		2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	
教育原理	教育論				○	○	○	○	○	○	○	○				○				○	○	○							
	教育課程論	○					○																						
	学習指導要領	○	○	○		○	○			○					○		○	○	○							○	○	○	
	道德教育	○		○											○		○	○											
	特別活動・総合学習		○			○					○				○		○	○											
	生徒指導	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	特別支援教育	○	○	○						○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	
	人権教育		○												○													○	
	キャリア教育・情報教育			○		○				○		○		○	○	○	○									○	○	○	
	社会教育・生涯学習																										○		
その他																													
教育法規	教育の基本				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	管理運営				○			○	○	○	○			○		○	○	○			○	○			○	○	○	○	
	児童生徒	○						○	○	○	○	○	○	○	○	○				○	○	○	○				○		
	教職員			○		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	特別支援教育				○						○	○																	
	学校保健・安全		○			○		○	○	○	○			○	○	○									○		○		
	教育行政															○													
	社会教育																												
	その他				○											○												○	
教育心理	発達		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	学習					○		○	○	○	○	○			○									○					
	人格・適応	○						○	○	○	○	○		○		○								○		○	○		
	その他の心理領域				○	○		○							○	○					○	○	○	○	○	○	○		
	教育評価				○	○	○	○			○				○									○		○	○		
	学級集団					○																	○						
教育史	西洋教育史				○	○	○	○	○	○	○	○				○				○	○	○							
	日本教育史			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○				○	○	○							
教育時事		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

※TACの講義やテキストでの取扱い論点に照らして「○（出題あり）」をつけています。受講の際に参考にしてください。（他社の参考書等とは各テーマの取扱い論点が異なる場合があります。また、ローカル問題については反映していません。）

教職教養 過去3年分の出題傾向表2 2021年～2023年実施試験

科目	分野	茨城県			埼玉県さいたま市			千葉県・千葉市			東京都			川崎市・相模原市			神奈川県・横浜市			新潟県・新潟市			富山県			石川県			福井県		
		2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021			
教育原理	教育論				○	○						○	○	○	○	○	○									○	○	○			
	教育課程論	○									○			○																	
	学習指導要領				○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○															
	道德教育									○		○			○																
	特別活動・総合学習										○	○	○	○																	
	生徒指導	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○			○	○	○	○
	特別支援教育		○		○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○												○			○
	人権教育					○						○	○																	○	
	キャリア教育・情報教育		○	○		○		○			○	○	○																		○
	社会教育・生涯学習																	○	○	○	○		○					○			
その他																		○													
教育法規	教育の基本	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	管理運営	○	○	○		○	○	○		○	○	○	○	○						○						○	○		○	○	
	児童生徒		○	○	○	○			○	○	○	○						○								○			○	○	
	教職員	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○		○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	特別支援教育		○			○									○		○													○	
	学校保健・安全	○	○		○	○	○		○	○	○	○						○					○	○	○	○	○	○			
	教育行政			○							○	○	○																		
	社会教育																														
その他									○						○																
教育心理	発達						○				○	○	○	○	○	○				○									○	○	○
	学習					○					○	○	○	○	○											○			○	○	
	人格・適応										○									○	○								○	○	
	その他の心理領域										○					○													○	○	
	教育評価					○			○			○	○	○	○									○					○	○	○
教育史	西洋教育史				○	○					○	○	○	○			○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	
	日本教育史						○				○	○															○		○	○	
教育時事		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○		○	○		○	○		○	○		○	○	○

※TACの講義やテキストでの取扱い論点に照らして「○（出題あり）」をつけています。受講の際に参考にしてください。（他社の参考書等とは各テーマの取扱い論点が異なる場合があります。また、ローカル問題については反映していません。）

教職教養 過去3年分の出題傾向表3 2021年～2023年実施試験

科目	分野	山梨県			長野県			岐阜県			静岡県・静岡市・浜松市			愛知県			名古屋市			三重県			滋賀県			京都府				
		2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021		
教育原理	教育論	○	○								○	○	○			○	○	○												
	教育課程論																													
	学習指導要領	○	○	○	○	○	○				○	○	○	○	○	○														
	道徳教育			○		○																					○	○	○	
	特別活動・総合学習	○	○		○		○							○																
	生徒指導	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○						○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	特別支援教育				○			○			○		○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	人権教育							○	○		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	キャリア教育・情報教育					○	○	○				○			○			○	○			○					○		○	
	社会教育・生涯学習 その他																													
教育法規	教育の基本	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	管理運営	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○																○	○	○	
	児童生徒		○	○		○								○			○	○							○					
	教職員	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	特別支援教育					○								○	○	○											○	○		
	学校保健・安全	○	○	○		○	○	○	○			○					○	○								○	○	○		
	教育行政																													
	社会教育																													
	その他								○	○																		○		
教育心理	発達		○	○			○	○	○		○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	学習							○	○	○			○	○					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	人格・適応							○	○	○									○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	その他の心理領域									○				○					○											
	教育評価	○											○									○	○							
	学級集団														○															
教育史	西洋教育史	○	○	○								○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	日本教育史	○	○	○						○			○	○	○				○											
教育時事		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

※TACの講義やテキストでの取扱い論点に照らして「○（出題あり）」をつけています。受講の際に参考にしてください。（他社の参考書等とは各テーマの取扱い論点異なる場合があります。また、ローカル問題については反映していません。）

教職教養 過去3年分の出題傾向表4 2021年～2023年実施試験

科目	分野	京都市			堺市・豊能地区 大阪府・大阪市			兵庫県			神戸市			大和高田市 奈良県			和歌山県			鳥取県			島根県			岡山県			
		2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	
教育原理	教育論	○	○		○		○			○	○	○			○	○	○					○		○		○		○	
	教育課程論				○											○													
	学習指導要領		○		○	○	○	○		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○					○	○	○	○	○
	道德教育													○	○	○													
	特別活動・総合学習																			○	○		○						
	生徒指導		○		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				○	○	○	○	○	○	○
	特別支援教育	○	○		○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				○	○	○	○	○	○	○
	人権教育	○	○		○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				○	○	○	○	○	○	○
	キャリア教育・情報教育					○	○		○	○		○	○			○							○	○	○	○	○	○	○
	社会教育・生涯学習																												
その他																													
教育法規	教育の基本	○				○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○		○		○	○	○	
	管理運営	○				○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○		○		○	○	○	
	児童生徒	○				○				○	○		○			○						○	○		○		○	○	
	教職員					○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	
	特別支援教育					○	○		○	○		○										○							
	学校保健・安全	○	○			○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				○	○		○	○	○	
	教育行政																												
	社会教育	○																											
その他		○			○		○								○	○	○					○							
教育心理	発達					○				○	○	○	○	○	○	○	○	○					○		○		○	○	
	学習					○	○	○		○		○	○	○	○	○	○	○								○	○	○	
	人格・適応							○		○			○	○												○	○		
	その他の心理領域		○								○		○			○										○	○	○	
	教育評価										○		○			○									○	○	○	○	
教育史	西洋教育史	○	○			○		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○							○		○	○	
	日本教育史					○				○		○	○	○	○	○	○	○								○	○	○	
教育時事		○	○			○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

※TACの講義やテキストでの取扱い論点に照らして「○（出題あり）」をつけています。受講の際に参考にしてください。（他社の参考書等とは各テーマの取扱い論点が異なる場合があります。また、ローカル問題については反映していません。）

教職教養 過去3年分の出題傾向表5 2021年～2023年実施試験

科目	分野	岡山市			広島県・広島市			山口県			徳島県			香川県			愛媛県			高知県			福岡県・福岡市・北九州市			佐賀県		
		2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021			
教育原理	教育論							○	○	○	○	○	○				○	○	○			○	○	○				
	教育課程論									○							○									○	○	
	学習指導要領	○	○	○	○	○	○	○		○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	道徳教育				○																○	○	○					
	特別活動・総合学習											○	○	○						○	○	○	○	○	○	○		
	生徒指導	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	特別支援教育	○	○		○	○	○	○	○	○	○				○	○	○				○	○	○	○	○	○		
	人権教育	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○						○	○	○	○	○	○	○	○	
	キャリア教育・情報教育	○	○	○	○					○	○	○								○		○	○	○	○	○	○	
	社会教育・生涯学習 その他																											
教育法規	教育の基本	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	管理運営				○		○	○	○	○			○	○	○			○	○						○	○	○	
	児童生徒				○	○	○			○	○	○					○			○	○	○	○	○	○	○	○	
	教職員				○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	特別支援教育				○	○		○			○		○							○	○					○		
	学校保健・安全	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○			○			○	○	○	○	○	○	○	
	教育行政									○																		
	社会教育										○																	
	その他						○																	○		○		
教育心理	発達							○	○	○	○	○	○							○			○	○	○	○		
	学習							○	○		○	○	○							○	○			○	○			
	人格・適応								○					○						○					○	○		
	その他の心理領域								○	○							○						○					
	教育評価 学級集団							○	○		○		○				○	○			○		○	○	○	○		
教育史	西洋教育史							○	○	○	○				○	○	○	○	○	○	○				○	○		
	日本教育史								○	○							○	○	○	○	○							
教育時事		○	○		○	○	○	○			○	○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		

※TACの講義やテキストでの取扱い論点に照らして「○（出題あり）」をつけています。受講の際に参考にしてください。（他社の参考書等とは各テーマの取扱い論点が異なる場合があります。また、ローカル問題については反映していません。）

教職教養 過去3年分の出題傾向表6 2021年～2023年実施試験

科目	分野	長崎県			熊本県			熊本市			大分県			宮崎県			鹿児島県			沖縄県		
		2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021	2023	2022	2021
教育原理	教育論	○	○	○				○			○	○		○	○		○			○	○	○
	教育課程論				○												○					
	学習指導要領	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	道德教育			○								○		○	○					○		○
	特別活動・総合学習													○	○	○				○		○
	生徒指導	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	特別支援教育	○	○		○	○	○	○	○		○	○		○	○		○	○		○	○	
	人権教育	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○		○			○	○	○			
	キャリア教育・情報教育		○	○				○		○			○	○		○						○
	社会教育・生涯学習																					
その他																						
教育法規	教育の基本	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	管理運営	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○				○		○
	児童生徒	○		○	○	○	○	○		○	○	○	○	○		○	○		○	○	○	○
	教職員	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	特別支援教育	○		○	○	○	○	○	○		○		○	○	○	○	○	○		○	○	○
	学校保健・安全	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○					○	○
	教育行政				○		○			○			○							○	○	
	社会教育																					
	その他					○			○			○	○	○	○							○
教育心理	発達	○	○		○	○	○	○		○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○
	学習	○		○	○	○		○		○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	
	人格・適応		○	○		○		○		○	○	○	○	○	○							○
	その他の心理領域		○		○	○						○	○				○	○				○
	教育評価	○		○	○		○			○	○	○	○			○			○	○		
	学級集団			○										○								
教育史	西洋教育史	○	○	○				○			○	○		○		○	○			○	○	○
	日本教育史	○	○	○				○	○		○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○
教育時事		○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

※TACの講義やテキストでの取扱い論点に照らして「○（出題あり）」をつけています。受講の際に参考にしてください。（他社の参考書等とは各テーマの取扱い論点が異なる場合があります。また、ローカル問題については反映していません。）

本書の特長と使い方

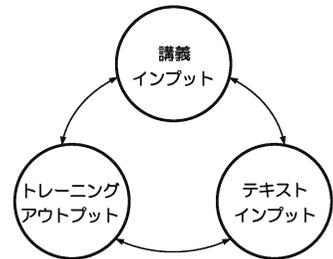
本書は教員採用試験合格のための専用テキストであり、次のような方針で作成されている。

1. 本書の構成

このテキストは、本書一冊で初めて学習する人でも、無理なく合格に必要な知識を身に付けられるよう、本試験における重要論点をわかりやすくまとめている。また講義とWebトレーニング（Web Schoolで学習可能）に沿った構成となっており、関連する事柄はコントロールタワーで確認できる。

2. 本書の使用法

講義はコントロールタワーの進捗に従い、このテキストに沿って進行する。講義では全体像の把握と重要論点を理解するための解説に重点が置かれるので、必要に応じてテキストの細かな情報にも目を通してほしい。また、学習した内容が本試験でどのように問われているのかを、Webトレーニングの該当問題を解いて必ず確認すること。



3. 本書の表記

(1) 「重要キーワード 暗記&checkシート」について

章の最後には、重要ワードのチェックリストを収載している。暗記ペンなどを使用して復習し、記憶の定着がされているか、定期的にチェックしよう。

(2) 「学習指導要領」について

本書中の「学習指導要領」は、特に記載がある場合を除いて、2017（平成29）年、2018（平成30）年公示版学習指導要領のことを示す。

教育心理学の概要

第1節 教育心理学とは

1. 教育心理学の定義

教育心理学とは、教育に関連する諸事象を心理学的に研究し、教育効果を高めるのに役立つ知見と技術を学ぶ学問である。教育心理学はよりよい教育実践を可能にするため、次のような役割を担う。

- ・子どもの行動、発達、学習などを研究し、明らかになった原理や法則から、教育課程に関する正しい知識と理論を構築していく
- ・構築された理論や知識を、教育活動に応用していく

2. 教育心理学の領域

教育心理学は、主に以下の領域において活用していくことが望まれる。

発達	<p>子どもの心身の発達について深く理解する。教育とは教育基本法にも定められているように、人間の「人格の完成」※1をめざす営みである。人格とは肉体及び精神すべてにおける人間の主体そのものであり、教師は子どもの心身の発達を促し、成熟へと導いていく役割を担う。</p> <p>人間の発達について理解することは、児童・生徒理解に基づいた教育指導を実現するために不可欠である。</p>
学習	<p>学習が成立する要件やメカニズムを理解することで、適切な教育課程の編成及び教育指導に役立てていく。</p> <p>学習とは人間が新たな知見を習得する行為であるが、その成立過程にはさまざまな要因が影響を及ぼす。たとえば学習者の知能や性質、経験、環境、他者による働きかけ、学習内容とその順番などがある。</p> <p>学習の成立要件とその過程を深く理解することにより、適切</p>

※1
第1条(2006年公布)

	な環境及び指導方法を模索していくことができるようになる。
人格 適応	人間にはそれぞれ性格や気質において個人差があり、多様な人格を有する個人が集団となって社会生活を営む。人間の人格と適応のあり方について深く理解することで、子どもの人格形成を促し豊かな学校生活と自己実現を助長するための方策を探っていく。
評価	教育活動とは、事前に作成した教育計画に基づき実施されるものである。そのため教師は、教育計画と教育の実施過程が適切であるかを測定し、その結果を次の教育計画の改善に役立てていく必要がある。 測定と評価についての理論と方法を理解することにより、適切な教育評価の実現を目指すことが大切となる。

第2節 心理学の歴史と主な人物

1. 心理学の歴史的発展

1860年頃、フェヒナー^{※1}が、刺激と感覚の物理的関係を明らかにする精神物理学の研究をはじめた。こうした大脳生理学の進歩に伴い、心理学は徐々に自然科学としての性格を帯びてくることとなった。

<p>構成心理学 (実験心理学)</p>	<p>「心の科学」としての心理学を創始したのは、ヴント^{※2}である。彼は人間の意識に着目し、自分で自己の意識を観察する内観法という方法を用いて、意識の分析を試みた。そしてさまざまな心的要素が結合する法則を明らかにすることで、認識の成立過程を探ろうとした。</p> <p>ヴントは意識の構成要素を純粹感覚と単純感情であるにとらえ、それらの要素がどのように組み合わせられているかを解明することで、人間の認識過程が明らかにできると考えた^{※3}。こうした要素の構成のあり方を問題とするヴントの心理学は、構成心理学と呼ばれる。</p>
<p>行動主義の心理学</p>	<p>ヴントの着目した意識は、外部からの観察ができない主観的な現象である。このためアメリカの心理学者ワトソン^{※4}は、心理学を「意識ではなく行動を扱う学問である」と定義し、意識を研究対象とするヴントの心理学を批判した。そして研究対象として行動に着目し、客観的な観察を通じて行動の法則性を明らかにしようと試みる。</p> <p>ワトソンはパブロフ^{※5}の条件反射説やジェームズ^{※6}の機能主義心理学（機能心理学）に影響を受けており、生体に外から与えられた刺激とそれに対する生体の反応との関係を明らかにすることで、人間の行動の法則性が解明できると考えた。</p> <p>つまり人間が特定の刺激を受けると、ある法則に基づき特定の反応がなされ、それが目に見える行動として現れると考えた。そしてその法則を明らかにすることで、人間の心理を深く理解できると主張した。こうした行動主義の考え方は、後にスキナー^{※7}やハル^{※8}、トールマ</p>

※1
(Gustav Theodor Fechner: 1801-1887)

※2



(Wundt, W: 1832-1920)

※3

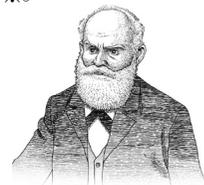
物質が小さい単位の原子の集合体で出来ているように、人の心もたくさんの要素の集合体のようなものだという考え方。

※4



(Watson, J. B.: 1878-1958)

※5



(Pavlov, I. P.: 1849-1936)

※6

(James, W: 1842-1910)

※7

(Skinner, B. F.: 1904-90)

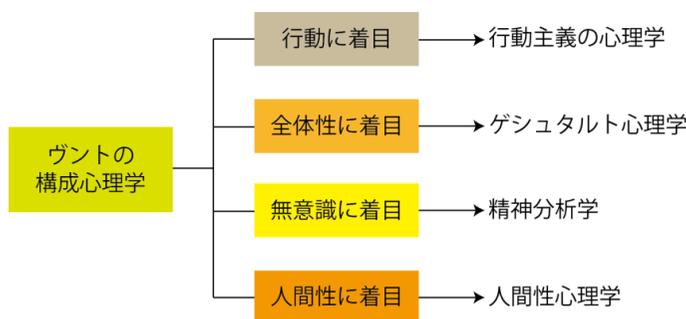
※8

(Hull, C. L.: 1884-1952)

	<p>ン※9らの新行動主義に受け継がれていく。</p> <p>主に北アメリカで発展した行動主義の考え方は、現在にも続く方法論的行動主義にも大きな影響を与え、今でも多くの実験心理学者が採用している。</p>	<p>※9 (Edward Chase Tolman:1886-1959)</p>
<p>ゲシュタルト心理学</p>	<p>北アメリカでワトソンの提唱した行動主義が盛り上がりを見せた頃、ドイツではヴェルトハイマー※10、ケーラー※11、コフカ※12らが台頭してきた。</p> <p>ヴェルトハイマーらは、人間の心理現象における全体的なまとまりが重要であると考え、人間の心を単なる要素の集合体とは見なせず、心的現象そのものを一つのまとまりとしてとらえていくことが重要だということで、ヴェントの構成心理学を批判した。</p> <p>こうした認知のまとまりに着目した心理学は、ゲシュタルト心理学と呼ばれる。</p> <p>ゲシュタルト心理学はレヴィン※13により社会心理学に応用されることとなる。レヴィンはリーダーシップを専制型、民主型、放任型に分類し、集団に及ぼす影響力について研究した。このような集団における心理学の理論は、主に教師による学級経営などに役立てられている。</p>	<p>※10 (Wertheimer, M. :1880-1943)</p> <p>※11 (Köhler, W. :1887-1967)</p> <p>※12 (Koffka, K. :1886-1941)</p> <p>※13 (Kurt Lewin:1890-1947)後に「社会心理学の父」と呼ばれた。</p>
<p>精神分析学</p>	<p>フロイト※14は、意識ではなく無意識を研究対象とした精神分析学を提唱した。彼は人間の精神活動において無意識が大きな役割を果たすと考え、人間の行動は自ら意識できない深層心理に蓄積された衝動(リビドー)に支配されていると考えた。</p> <p>フロイトは自身のもとに運び込まれた患者の不適応状態※15を、自由連想法や夢分析などの手法を用い、患者の無意識下に抑圧された幼児期の苦い経験や不安・恐怖などを意識の中に取り出すというような治療を行った。また年齢に応じてリビドーが向かう方向は変化すると考え、幼少期の欲求が向かう方向性を段階的に区分した発達理論を唱えた。</p> <p>フロイトの唱える人格理論や無意識の世界に関する考察は、その後の心理学にも大きく影響し、さまざまな学</p>	<p>※14 (Freud, S. :1856-1939)</p> <p>※15 心理的な不安定さのこと。</p>

	<p>派を生み出した。なかでも個人心理学のアドラー※16や、分析心理学※17のユングが有名である。</p>
<p>人間性心理学 (現象学的心理学)</p>	<p>ディルタイ※18やシュプランガー※19は、実験中心の心理学では人間を断片化しすぎており、生きている人間の精神活動をありのまま追体験することが重要であると主張し、実験室での再現や可視化ができない愛情や想像力など、人間らしい不確定な現象をありのままに受け入れるべきと考えた。これを了解心理学という。</p> <p>この了解心理学の考え方は、後に実存主義心理学のフランクル※20や、人間主義心理学のマズロー※21、ロジャーズ※22にも影響を与える。</p> <p>マズローは欲求の階層説を唱え、生理的欲求が満たされることで、承認欲求などの、より社会的な第二次欲求があらわれると唱えた。彼は自己実現という概念に注目し、人間らしい欲求の充足に焦点をあてる人間主義心理学を創始した。</p> <p>またアメリカの臨床心理学者であるロジャーズは、人間と状況とのかかわりを重視し、自由・責任・愛情・自己実現など肯定的で人間特有の現象を重視すべきだという人間性心理学を提唱した。そしてクライアント（来談者）をありのまま受容し、共感することを軸とした非指示的カウンセリングの手法を考案する。</p>

- ※16
(Alfred Adler :1870-1937)
アドラー心理学ともいう。アドラーは、人を動かすのはリビドーではなく、劣等感を補償して力を得ようとする欲求だとした（優越欲求）。
- ※17
(C. G. Jung:1875-1961)
ユング心理学ともいう。
- ※18
(Dilthey, W. :1833-1911)
- ※19
(Spranger, E. :1882-1963)
- ※20
(Frankl, V. :1905-97)
- ※21
(Maslow, A. H. :1908-70)
- ※22
(Rogers, C. R. :1902-87)



重要キーワード 暗記 & checkシート

第1章 教育心理学の概要

■教育心理学とは

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの行動、発達、学習などを研究し、明らかになった原理や法則から、教育課程に関する正しい知識と理論を構築していく。 ・構築された理論や知識を、教育活動に応用していく。 |
|--|

■教育心理学の領域

発達	子どもの心身の発達について、深く理解する。
学習	学習が成立する要件やメカニズムを理解することで、適切な教育課程の編成及び教育指導に役立てていく。
適応	人間の人格と環境への適応について理解することで、教育現場のみならず社会生活全般への適応を促し、子どもたちの自己実現を支援する。
評価	測定と評価についての理論と方法を理解し、適切な教育評価の実現を目指す。

■心理学の歴史と主な人物

構成心理学	ヴェント	・内観法
行動主義心理学	ワトソン	・行動観察、分析 ・法則性
ゲシュタルト心理学	ヴェルトハイマー	・認知のまとまり
社会心理学	レヴィン	・場の理論 ・リーダー論
精神分析学	フロイト	・無意識 ・衝撃（リビドー）
人間性心理学	マズロー	・欲求階層説 ・自己実現

発達

第1節 発達とは何か

1. 発達の原理

(1) 発達の定義

発達という言葉から、子どもが成人になるまで、心身が強くなり大きくなっていく様をイメージしがちであるが、必ずしもそれだけが発達ではない。

アメリカの発達心理学者であるエリクソン^{※1}は、ライフサイクルという概念を用い、人間が生まれてから死ぬまでの変化を発達段階として示した。

発達とは連続的な変化の過程であり、そこには一定の順序がある^{※2}。外見的には突然出現したように思える現象であっても、継続的な観察をしていると、その変化に通じる何らかの予兆を見つけることができる。よって個々の現象を時間的な関連においてとらえることが、発達を理解する上で重要となる。

(2) 発達初期の経験と学習

「三つ子の魂百まで」ということわざがあるが、これは「小さいときに獲得したことは一生変わらない」という意味で使われている。このことわざが示す通り、心理学的には初期経験や初期学習は非常に重要なものとなる。

ローレンツ^{※3}は、生まれたばかりのハイイログンの雛たちに対し、人間が親鳥のマネをすることによって、母親に成り代わることができるという現象を発見した。この現象を刻印づけ^{※4}という。

学習には、出生直後のある一定の短い期間に限られて成立し、一度成立すると極めて安定的に、後の行動に影響を与えるものがある。動物においても、人間においても、初期学習・初期経験のもつ重要性は大きい。

(3) 身体の発達：運動と器官

人間の運動機能を司る脳の運動野は2歳で完成する。誕生からの2年間は、

※1
(E. H. Erikson: 1902-1994)

※2
発達の序列の原理という。

※3
(K. Z. Lorenz: 1903-1989)

※4
インプリンティング、刷り込みともいう。

首を自律的に支えることができない身体から、階段を上り下りできるまでの身体に成長し、生涯で最も著しい発達を遂げる時期である。

運動を統制する神経系や筋肉の発達には順序があり、頭部から足へ、また肩から指先へとといった身体の中部から末端へと、可動域が拡大していく。心臓や脳、呼吸器などの器官や機能は、その発育過程にそれぞれ違いがある。スキヤモン^{※5}は、器官の発達を4つのパターンに分けた**発達曲線**を提唱した。

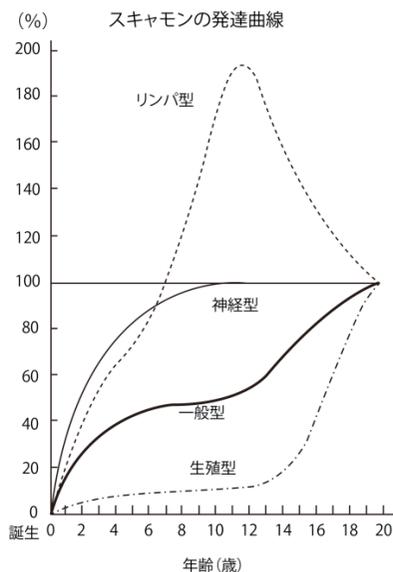
神経型	脳、脊髄、視覚器、頭径のこと。神経系は、リズム感や体を動かすことの器用さを担う。出産直後から急激に発達し、4、5歳で成人の約80%に達する。
リンパ型	胸腫、リンパ節、同質性リンパ組織のこと。免疫力を向上させる扁桃やリンパ節等のリンパ組織の発達を指す。 生後～12歳頃までにかけて急激に成長し、大人のレベルを超えるが、思春期を過ぎた頃から大人のレベルに戻る。
一般型	呼吸器、消化器、腎臓、心大動脈、脾臓、筋全体、骨全体、血液量のこと。一般型は身長・体重や肝臓、腎臓等の胸腹部臓器の発育を示す。 生後から幼時期までに急速に発達するが、その後は次第に緩やかになり、第二性徴が現れる思春期になると再び急激に発達し大人のレベルに達する。
生殖器型	睾丸、卵巣、副睾丸、子宮、前立腺のこと。 児童期前半までは僅かに成長するが、14歳あたりから急激に発達する。生殖器系の発達に伴い男性ホルモンや女性ホルモン等の性ホルモンの分泌も多くなる。

※5

(Scammon, R. Everingham:
1883-1952)
アメリカの医学者

【スキヤモンの発達曲線】

脳は出生直後から急速に発達し、学童期の脳容量は成人の水準に近くなる(神経型)。これに対し、身体の発達は乳幼児期と学童期に成長促進が見られ(一般型)、二次性徴は学童期に成長促進をし(生殖器型)、免疫機能は学童期にピークを示す(リンパ型)。



(4) 精神の発達、認知

幼児が外界を認知する場合、大人のように物事を客観的にとらえるのではなく情緒的・要求的にとらえようとする。ウェルナー^{※6}はこの主観と客観が未分化な認知的特徴を相親的知覚^{※7}と呼び、発達とは未分化な全体的反応が特殊的・分節的な反応に分化し、同時に新しいより複雑な体制へと統合される場所であると唱えた。

知的な活動の発達は、大きく2つの次元でとらえることができる。

- ・一般知能、あるいは頭の良さという次元
- ・内容領域ごとの発達という次元

知的な活動において、経験した内容はそれぞれ領域ごとに分かれて獲得される。

脳のレベルでいえば、ピンカー^{※8}の提唱した、モジュールと呼ばれる知能内容ごとに分かれて知的な処理を行う部分が存在する。例えば数のモジュールは、外界の対象を「数」という面からとらえて処理するため、林檎とボールという異なる物質があっても、「どちらも3個ある」というように個数での把握ができる。もし数のモジュールが存在しなかったら、個数という観点から対象をとらえることができず、数による分類や序列付けをすることができない。

数のモジュールなどは、生後半年を過ぎた頃に獲得されるといわれている。しかしそのモジュールを用いて、お釣りの計算をしたり、2次関数や微分積分の問題を解くためには、そうした数的処理を行うための知識や方法

※6
(Werner, H. : 1890-1964)

※7
「そうぼうてき」。人間の表情などだけで外界の状況を把握しようとすること。

※8
(Steven, A. Pinker : 1954-)

を獲得するための学習^{※9}が必要となる。あくまでモジュールはものごとを処理するための精神能力であり、それが処理スキルの獲得に直結するものではない。

人の認知を理解する上でもうひとつ基本となるのが、**ピアジェ**^{※10}の提唱した**シエマ**という概念がある。ピアジェは、環境による学習が認知の発達に及ぼす影響について着目し、人間が物事を認知する際の基本的な枠組みが存在すると考えた。そして子どもは既に持っている知識・能力を使って外界に働きかけ、知識や枠組みを変化させることで知的発達をしているのだと唱えている。

シエマとモジュールは類似した概念であるといえるが、モジュールがより生得的で生理学的な概念であるのに対し、シエマはより環境との関わりや学習プロセスでの発展に焦点をあてた、道具的な概念であるといえる。

※9
教科でいえば算数や数学

※10
(Jean Piaget:1896-1980)
スイスの心理学者

2. 発達をめぐる論争① <発達の主体は何か>

発達とは、人間の変化について表した概念である。では人間の発達を理解するためには、「何の」変化に焦点をあてるべきだろうか。ここでは**ピアジェ**と**ワロン**^{※1}の論争をとりあげる。

ピアジェとワロンは、人間観の違いから、人間存在の主体をとらえる視座が異なっていた。

ピアジェは周囲の人々との関係性から切り離れた生物学的な「**固体**」として人間をとらえ、「**知能の構造**」から発達をとらえた。また人間という主体を理解する上で、知能を特別な領域であると位置づけ、認知の変化に焦点をあてることで発達を説明し、質問と診断を軸とした臨床的研究の手法を確立、及び子どもの言語、数や量の概念などの研究を展開していった。

これに対しワロンは、「**パーソナリティ全体**」から発達をとらえ、個人を他者と切り離すことのできない存在として考えた。〈身体—自我—社会性〉を一体的に内包するパーソナリティに着目し、その全体的な変化をとらえることで、人間の発達を理解しようとした。

※1
(Henri Wallon
:1879-1962)
フランスの精神科医、心理学者、教育者

3. 発達をめぐる論争② <発達の要因は何か>

人間は生物学的に、両親から受け継いだ遺伝子(DNA)に組み込まれた遺伝情報によって生物としての形質が決まっていく。しかしルソー^{※1}が「人間は教育によってつくられる」と述べたように、教育を含めた環境要因も心身の形成に大きな影響を及ぼす。

<p>孤立要因説</p>	<p>遺伝か環境か、いずれか一方の要因によって発達が規定されるとする立場である。生まれながらに持つ遺伝的要因を重視する考え方を生得説^{※2}という。</p> <p>発達心理学者のゲゼル^{※3}は、遺伝的要因を重視する成熟優位説を主張し、双生児統制法を用いて、生後46週の一卵性双生児を対象にした実験を行った。</p> <p>この実験では、双子の1人には早いうちから階段を上がる練習をさせておき、もう1人は少し遅らせて練習を始めさせる。すると先に始めた子どもより、あとから始めた子どものほうが階段上りをマスターするのが早かった。</p> <p>この結果から、学習が効果的に修得されるためには、レディネス^{※4}の成立が不可欠であると考えた。双子の実験では、先に練習をはじめた子どもには、まだ階段を上るために必要なレディネス^{※5}が備わっていなかったということになる。したがって何かの学習を行うときは、その獲得に必要なレディネスの有無について見極める必要がある。</p> <p>ウィリアム・ジェームズ^{※6}は人間の行動を本能という概念で説明した。ピンカー^{※7}は人間には生まれつき認知モジュール^{※8}が備わっており、それによって特定のスキルを習得する学習が可能になると主張した。</p> <p>またチョムスキー^{※9}は言語の獲得過程において、子どもが生まれながらにもつ言語の受け入れ能力が十分でないと学習が成立しないと唱えた。</p> <p>対して成長過程での経験が発達に大きく影響するという考え方は、後天説または経験説と呼ばれる。行動主義心理学者のワトソンは、主として環境を通しての学習が発達を規定するのだとして環境優位説を唱えた。</p>
<p>輻輳説^{※10}</p>	<p>1914年、「遺伝も環境も」関係するという輻輳説を提唱したシュテルン^{※11}は、「発達を規定するのは遺伝か環境か^{※12}」という論争に新たな答えをもたらした。</p> <p>彼は個性や知性に関する研究の先駆者であり、IQとい</p>

※1



(Jean J. Rousseau :1712-1778)
フランスの教育哲学者

※2
生得「論」ともいう。

※3
(Arnold L. Gesell :1880-1961)
アマラとカマラの分析記録で知られる。

※4
学習の準備性

※5
この場合は身体的発達基礎を示す。

※6
(W. James :1842-1910)

※7
(Steven A. Pinker :1954-)

※8
遺伝的な精神能力のこ

※9
(Noam Chomsky:1928-)

※10
「ふくそうせつ」

※11
(William L. Stern :1871-1938)
ドイツの心理学者、哲学者

※12
nature or nurture ?

	<p>う概念を創始した人物である。輻輳とは、いくつかのものが加算されるという意味だが、シュテルンは遺伝的要因と環境要因の両方がそれぞれ加算される形で、発達に影響を及ぼすのだと考えた。</p> <p>また、ルクセンブルガーは、シュテルンの輻輳説を対極説として図式化した。</p>
<p>相互作用説</p>	<p>シュテルンの輻輳説を発展させる形で、遺伝と環境との相互作用に着目する説がでてきた。これは遺伝と環境とがそれぞれ加算されるのではなく、相乗的に作用しあいながら発達を決めていくという考え方である。</p> <p>主な学説には、ジェンセン※13の唱えた環境閾値説※14がある。環境閾値説は、形質の発現に必要な環境要因の量や質は、それぞれの形質に固有のものであり、一定水準をもっているという考え方である。</p> <p>つまり遺伝的な素質・可能性と環境条件の双方が重要であり、どちらか一方が整っているだけでは形質の発現を促すことができないとしている。</p> <p>【ジェンセンの環境閾値説】</p> <p><特性の種類と必要な刺激量（閾値）>※15</p>

※13
(Jensen, A. R. :1923-2012)
※14
「かんきょういきちせつ」

※15
特性A：身長など。環境の影響は弱く、必要とされる環境の量はわずか。
特性B：知能検査の成績など。
特性C：学業成績など。
特性D：絶対音感など。かなり豊かな環境が必要とされる。